

詩篇 124 篇

都上りの歌。ダビデによる

- 1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」さあ、イスラエルは言え。
- 2 「もしも主が私たちの味方でなかったなら、人々が私たちに逆らって立ち上がったとき、
- 3 そのとき、彼らは私たちを生きたまのみこんだであろう。
彼らの怒りが私たちに向かって燃え上がったとき、
- 4 そのとき、大水は私たちを押し流し、流れは私たちを越えて行ったであろう。
- 5 そのとき、荒れ狂う水は私たちを越えて行ったであろう。」
- 6 ほむべきかな。主。主は私たちを彼らの歯のえじきにされなかった。
- 7 私たちは仕掛けられたわなから鳥のように助け出された。わなは破られ、私たちは助け出された。
- 8 私たちの助けは、天地を造られた主の御名にある。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

「祭で歌われる祈り」の第二篇になりますが、過去に経験した危機を神殿の中で思い起こしているかのような詩篇です。前篇でも「あざけり」「さげすみ」(123:4) といった敵対者の忌まわしい態度が綴られていましたが、本篇では「彼らの怒り」(3 節)、「大水」「流れ」(4 節)、「荒れ狂う水」(5 節) と、より攻撃性を増した彼らの行動が見えてまいります。しかも、「**私たちを生きたまのみこんだであろう**」(3 節)、「**私たちを越えて行ったであろう**」(4 節、5 節) と、濁流のごとく集団で攻め寄せる敵対者たちの勢いが感じられます。そのような恐ろしい経験を経て、尚も生かされている喜び、主が守ってくださったことへの感謝をここに述べているのです。

1 節と 2 節で続け様に「もしも主が私たちの味方でなかったなら」というフレーズが出てきます。一回目は先唱者が朗唱し、二回目はそれに答えるように会衆が再唱する。そのような交読的な詩篇としても価値があります。主がイスラエルの味方でいてくださったからこそ、もはやこれまでと思えるような危機から救われたのです。この記事をよく表している歴史的出来事としては、モーセに引き連れられたイスラエルの民が紅海を渡ろうとしたときに、主が海の水を分けてくださった事件が思い起こされます(出 15:1-21)。そのとき、追手であったエジプト人は跡形もなく海の水に吞まれてしまいました。

私たちの現実においても、主が守っておられたことを知る場面が少なからずあるでしょう。牧会者として生きてくるなかで、牧師生命が断たれてもおかしくはなかった出来事が度々あったことを思い起こします。後になって振り返ると、それらを乗り越えさせてくださった主が共におられたこと、その経験を通して人間として成長させられた自分がいることを知るのである。

6～7節ではイメージが変わり、「彼らの歯のえじき」（6節）、「仕掛けられたわな」「鳥」（7節）など、獐猛な動物と弱い鳥のような表現が出てきます。目に見える世界では攻撃する側の力ばかりが目立ちますが、主は人の目に見えないところで働きかけ、人間が想像もつない方法で問題を解決へと導いていかれます。悪しき者の企みは神の知恵の前には役に立たないのです。

最後に8節の聖句に心を合わせて終わらしましょう。「**私たちの助けは、天地を造られた主の御名にある**」。詩人が見ているところはもはや「造られた存在」ではありません。天地を創造された力強い神に向けられています。「**主の御名**」にこそ助けがあると宣明するところなど、「ダビデの詩」と呼ばれるにふさわしい特徴を含んでいます。主の御名（ヤハウエ）とは、「存在する者」「イスラエルと共にある方」という意味です。20:7も引用しておきましょう。

ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。